

序. イエシュアはキリストです

ベレーシート

●私たちがしばしば使っている「イエス・キリスト」ということばは、「イエスはキリストです」という初代教会の信仰告白です。その頭に「主」ということばをつけて、「主イエス・キリスト」という言い方もします。「主」はローマの皇帝に使われる称号「キュリオス」(κύριος)で、ヘブル語の「アドナイ」(יהוה)を意味します。「イエスはキリストである」と告白する者が、「キリスト者」と呼ばれたのです。

●「イエス・キリスト」

ヘブル語では「イエシュア・ハマシーアツハ」(ישועה בן יוסף)、ギリシア語では「イエスース・ホ・クリストス」(Ἰησοῦς ὁ Χριστός)、英語では「ジーザス・クライスト」(Jesus Christ)と言います。「イエス・キリスト」というのは、イエスが名前(固有名詞)で、キリストが苗字ということではありません。「キリスト」は職名です。ちなみに、「ヨセフの子イエス」とあれば、苗字に相当するのは「ヨセフの子」の部分です。

●「キリスト」とは、神の働きのために特別な力と権威を授けるため「油注がれた者」を意味します。旧約では、「王」「大祭司」「預言者」にのみ任職の油が注がれました。したがって、「イエス・キリスト」とは、イエスが神からの任職の油を注がれた「王」であり、「大祭司」であり、「預言者」という告白的表現なのです。初代教会においては、「イエスがキリストであった」ということが「良き知らせ」(福音)でした。この福音が人々を救うので、「救い主」とも言われているのです。「救い」は「福音」からもたらされるのです。

1. 「イエシュアがキリストである」ことが、初代教会にとっての「福音」であった

●「イエシュアは救い主」ですという言い方は決して間違いではありませんが、「救い主」という言い方は、「・・・から救ってくださる主」ということが背景にあり、当然、それは「罪からの救い」ということに焦点が当てられます。しかしそれはイエシュアが「キリスト」でなければ、成り立たないことなのです。しかも「キリスト」という表現は、旧約のイスラエルの物語が土台となっています。その土台がはぎ取られるとき、「イエシュアは救い主です」ということが前面に押し出されますが、初代教会の信仰の告白は「イエシュアはキリスト」であったのです。使徒パウロも伝道旅行において聖書(旧約=タナフ)を拠り所として、イエシュアが「メシア」(キリスト)であったことを、心血を注いで論証したのです。

●共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)の前半は、「イエシュアとはだれか」ということが扱われています。

【新改訳 2017】マタイの福音書 16章 13～17節

初代教会の信仰告白

- 13 さて、ピリポ・カイサリアの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに「人々は人の子をだれだと言っていますか」とお尋ねになった。
- 14 彼らは言った。「バプテスマのヨハネだと言う人たちも、エリヤだと言う人たちもいます。またほかの人たちはエレミヤだとか、預言者の一人だとか言っています。」
- 15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」
- 16 シモン・ペテロが答えた。「**あなたは生ける神の子キリストです。**」
- 17 すると、イエスは彼に答えられた。「バルヨナ・シモン、あなたは幸いです。このことをあなたに明らかにしたのは血肉ではなく、天におられるわたしの父です。」

並行記事として、

- (1)マルコの福音書 8 章 27～30 節・「**あなたは、キリストです。**」
- (2)ルカの福音書 9 章 18～20 節・「**神のキリストです**」とあります。
- ※いずれも「キリスト」という言葉が共通しています。

●福音書の後半のテーマは、上記にあげた前半の結論、すなわち「あなたはキリストです」の直ぐ後に何度も繰り返して出てきます。それは、「キリストはなにゆえに来られたのか」ということです。換言するならば、**キリスト(メシア)の苦難と栄光**が綴られています。それは聖書(旧約)全体の中に預言されていたことで、イエシュアはその実現者(完結者)として遣わされたのです。

【新改訳 2017】マタイの福音書 16 章 21 節

そのときからイエスは、ご自分がエルサレムに行って、長老たち、祭司長たち、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならないことを、弟子たちに示し始められた。

並行記事として、

(1)【新改訳 2017】マルコの福音書 8 章 31 節

それからイエスは、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。

(2)【新改訳 2017】ルカの福音書 9 章 22 節

そして、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならない、と語られた。

●いずれも、**メシアは「捨てられ」「殺され」「よみがえる」という事実**が語られています。

2. 使徒の働きにおける「福音」の宣教

初代教会の信仰告白

●初代教会における「福音」は、イエシュアがキリストであるという事実でした。使徒の働きを見るなら、そのことが歴然としています。

(1) 使徒ペテロ

①【新改訳 2017】使徒の働き 2 章 36 節

ですから、イスラエルの全家は、このことをはっきりと知らなければなりません。神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。

(2:24 しかし神は、イエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、あり得なかったからです。)

②【新改訳 2017】使徒の働き 3 章 20 節

そうして、主の御前から回復の時が来て、あなたがたのためにあらかじめキリストとして定められていたイエスを、主は遣わしてくださいませ。

(新改訳改定第三版では、「それは、主の御前から回復の時が来て、あなたがたのために**メシアと定められたイエス**を、主が遣わしてくださるためなのです。」と訳されています。「回復の時」とはメシアの再臨の時です。)

③【新改訳 2017】使徒の働き 5 章 42 節

そして、毎日、宮や家々で教え、**イエスがキリストであることを**宣べ伝え続けた。

(2) 伝道者ピリポ

【新改訳 2017】使徒の働き 8 章 12 節

しかし人々は、ピリポが神の国とイエス・キリストの名について宣べ伝えたことを信じて、男も女もバプテスマを受けた。(神の国とイエシュアがキリストであることとの関係を、ピリポは宣べ伝えています。)

(3) 使徒パウロ

①【新改訳 2017】使徒の働き 9 章 22 節

しかし、サウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。

②【新改訳 2017】使徒の働き 17 章 2~3 節

2 パウロは、いつものように人々のところに入って行き、三回の安息日にわたって、聖書に基づいて彼らと論じ合った。

3 そして、「キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならなかったのです。私があなたがたに宣べ伝えている、このイエスこそキリストです」と説明し、また論証した。

初代教会の信仰告白

③【新改訳 2017】使徒の働き 18 章 5 節

シラスとテモテがマケドニアから下って来ると、パウロはみことばを語ることに専念し、イエスがキリストであることをユダヤ人たちに証した。(「証した」を、新改訳改定第三版では「はっきりと宣言した」と訳されています。)

④【新改訳 2017】使徒の働き 28 章 31 節

少しもはばかりことなく、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

(4) 伝道者アポロ

【新改訳 2017】使徒の働き 18 章 28 節

聖書によってイエスがキリストであることを証明し、人々の前で力強くユダヤ人たちを論破したからである。

I. イエシュアは預言者です

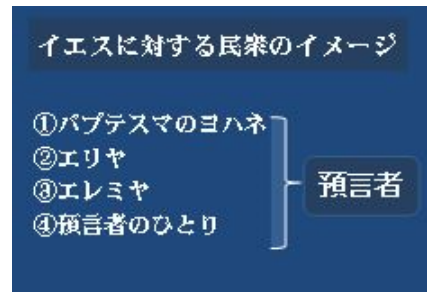
ベレーシート

●「イエシュアはキリスト」という初代教会の信仰告白の中には、ナザレのイエシュアが「**預言者**」であったということが含まれています。今日、イエシュアの語ったことばは、ユダヤ的・ヘブル的背景が分からないと正しく理解することができないということが言われるようになりました。それはどういうことでしょうか。「**イエシュアはキリストです**」という初代教会の信仰告白は、**ユダヤ的・ヘブル的背景をもった信仰告白だからです**。これが今回、「イエシュアはキリストです」というテーマを掲げている所以です。

●イエシュアとその弟子たちは、当時、ユダヤ教の中の「ナザレ派」というひとつの分派とみなされていました。しかし初代教会が伝えた「福音」(グッド・ニュース)とは、まさに「ナザレのイエシュアこそ、キリストである」ということだったので。それゆえ、「イエシュアはキリスト」であるという告白が意味するところを知る必要があるのです。「イエシュアはキリストである」と信じることで、私たちに「救い」がもたらされるからです。

1. 人々はイエシュアをどのように見ていたか

●イエシュアの一行がピリポ・カイサリアに行かれた時、イエシュアは弟子たちに尋ねてこう言われました。「人々はわたしのことをだれだと言っていますか。」と。弟子たちの答えによれば、右の図にあるように、「バプテスマのヨハネ」とか、「エリヤ」「エレミヤ」の再来とか、あるいは「預言者のひとり」と言っているとイエシュアに言いました。ここにあげられている名前はすべて預言者の名前です。つまりイエシュアは、旧約に登場した預言者のイメージとして人々の目に映っていたのです。



●他にも、イエシュアの公生涯において、人々がイエシュアを「預言者」であるとみなしていたと分かる多くの記述があります。たとえば、以下がそうです。

①ルカの福音書 7章 16 節

人々は恐れを抱き、「大預言者が私たちのうちに現れた」とか、「神がその民を顧みてくださった」などと言って、神をあがめた。(ナインの町の人々がイエシュアのことを「大預言者が私たちのうちに現われた」と言っています。なぜなら、イエシュアがエリヤやエリシャが行ったのと同じ奇蹟をしたからです。)

②マタイの福音書 21章 46 節

それでイエシュアを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエシュアを預言者と認めていたからである。

③ルカの福音書 24 章 19 節

イエシュアが、「どんな事ですか」と聞かれると、ふたりは答えた。「ナザレ人イエスのことです。この方は、神とすべての民の前で、行いにもことばにも力のある預言者でした。」(エマオの途上の二人の弟子)

④ヨハネの福音書 4 章 19 節

「先生。あなたは預言者だと思います。」(サマリヤの女)

2. イエシュアは自分をどのような者として公言されたか

●ルカの福音書 4 章 24～27 節において、イエシュアは「預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ」と言って、自分をエリヤやエリシャになぞらえ、自分は預言者だと公言しています。また、同様の主張は、ルカの 13 章 33 節で「預言者がエルサレム以外の所で死ぬことはありませんからです。」と言った箇所にも見ることができます。

3. 預言者とはどのような者か

●ところで、「預言者」とはどのような務めを与えられた者をいうのでしょうか。今日、自分の将来が不安なため、多くの人が自分の運勢を占い師に見てもらったりします。これは一国の運命を左右する政治家たちもそうするのです。将来起こることを語る者に対しては、「予言者」という字を書きます。しかし「預言者」という場合には、言葉を預かるという意味で「預言者」ということばを使います。それは、単に将来起こることを語るというだけではなく、神のことばを預かり、神の代弁者として語り伝えるという特別な務めを与えられた者のことです。

●イスラエルの歴史において、イスラエルの父祖アブラハムは神から「預言者」と言われていました(創世記 20:7)。アブラハムはどのような意味において、神から「預言者」と言われたのでしょうか。その答えは申命記 34 章 10 節にあります。そこには「モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかった。彼を【主】は、顔と顔を合わせて選び出された。」と記されています。つまり、預言者とは「顔と顔を合わせている者」であり、「神との親しいかかわりを許されている者」、それゆえに、「隠された神の秘密を知っている者」、また「その秘密を人々に伝えるために、神から信頼に値すると認められた者」といった意味なのです。

●「預言者」に共通している特徴があります。それは、自分に与えられたことばが自分のものではなく、神からのものであり、それを他の人々に伝えるために受けたのだと確信しているということです。そのような預言者のひとりであるモーセが、その生涯の終わりにこう語っています。

【新改訳 2017】申命記 18 章 15 節

あなたの神、【主】はあなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のような一人の預言者をあなたの

初代教会の信仰告白

ために起こされる。あなたがたはその人に聞き従わなければならない。

●「私のような一人の預言者」とは、「主と、顔と顔とを合わせるような預言者」のことです。第二のモーセ、つまり、メシア的人物である「終末の預言者」を指すものと解釈されています。御子イエシュアは永遠に「御父のふところにおられた方」です。そして遣わされたこの地上でも、いつも御父と密接なかかわりを持っておられました。それは「顔と顔とを合わせている」関係です。それゆえ御子イエシュアが、自分の語ることはわたしのものではなく、御父のもの、わたしを通して御父が語っているのだと言いました。一切、それに付け加えることなく、自分流に解釈したり、注釈したりすることなく、隠されていた神のご計画とみこころを、またみ旨と目的をありのままに語ったのです。

4. 預言者として、神の最後の切札であるイエシュア

【新改訳 2017】ヘブル人への手紙 1 章 1～2 節

- 1 神は昔、預言者たちによって、多くの部分に分け、多くの方法で先祖たちに語られましたが、
- 2 この**終わりの時**には、御子にあって私たちに語られました。神は御子を万物の相続者と定め、御子によって世界を造られました。

●ヘブル人への手紙の著者は、神が預言者を通して、長い歴史の中で、そのときそのとき、またさまざまな形で繰り返し語られたと記しています。イスラエルの歴史において預言者たちが最も多く登場した時代があります。それは、神によって立てられたはずのイスラエルの王たちが神の道から逸脱していった時代でした。そうした時代に、神によって立てられた預言者が神の代弁者として厳しいことばでその逸脱を非難し、神の道に立ち返るようと諭したのです。それが旧約聖書にある「預言書」という形でまとめられています。大小あわせて 17 巻あります。そこには、いろいろな時代に、いろいろな預言者たちを通して語られた神のことばが記されています。しかし、預言書は単に語られた時代の人々にだけでなく、本来、預言者は神の隠された秘密を明かされた存在ですから、語られた人々の理解を越えた神のご計画も同時に語られているのです。ですから、預言書を深く学ぶことで、隠された神のみこころや神の深い遠大なご計画を知ることができるのです。

●ヘブル書 1 章 2 節に「**終わりの時**」とあるように、神のご計画においては、イエシュアの登場は「終わりの時」なのです。つまり、最終的な神の切札としての代弁者なのです。しかも単に「語られた」だけでなく、「わたしを見た者は、父をも見たのです」(ヨハネ 11:9)と語られたように、神(御父)を「見せた」という点においても他の預言者にはない、実にユニークな面をもった孤高の預言者、それが御子イエシュアなのです。それはまさに詩篇 1 篇に記された「その人」(「ハーイーシュ」**שִׁיחַ**)です。

●ところが、神の民とされたイスラエルは、あらゆる時代において、神から遣わされた預言者のことばを信じることはありませんでした。マタイの福音書 21 章 33～45 節(マルコ 12:1～12、ルカ 20:9～19)に

初代教会の信仰告白

記されている「ぶどう園と農夫」のたとえはその事実を語っています。そのたとえ話を見てみましょう。

【新改訳 2017】マタイの福音書 21 章 33～46 節

- 33 もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がいた。彼はぶどう園を造って垣根を巡らし、その中に踏み場を掘り、見張りやぐらを建て、それを農夫たちに貸して旅に出た。
- 34 収穫の 때가近づいたので、主人は自分の収穫を受け取ろうとして、農夫たちのところにもしもべたちを遣わした。
- 35ところが、農夫たちはそのしもべたちを捕らえて、一人を打ちたたき、一人を殺し、一人を石打ちにした。
- 36 主人は、前よりも多くの、別のしもべたちを再び遣わしたが、農夫たちは彼らにも同じようにした。
- 37 その後、主人は『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、息子を彼らのところに遣わした。
- 38すると農夫たちは、その息子を見て、『あれは跡取りだ。さあ、あれを殺して、あれの相続財産を手に入れよう』と話し合った。
- 39そして彼を捕らえ、ぶどう園の外に放り出して殺してしまった。
- 40ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするでしょうか。」
- 41彼らはイエスに言った。「その悪者どもを情け容赦なく滅ぼして、そのぶどう園を、収穫の 때가来れば収穫を納める別の農夫たちに貸すでしょう。」

●このたとえ話に出てくる登場人物

- ①「ある人」とは、神ご自身のこと
- ②「自分のぶどう園」とは、神の民イスラエルのこと
- ③「農夫たち」とは、イスラエルの指導者たちのこと
- ④「しもべたち」とは、神から遣わされた預言者たちのこと
- ⑤「ある人の愛する息子」とは、御子イエシュアのことです。

●繰り返し、繰り返し、ご自分のしもべを遣わしたぶどう園の主人。そして最後には、自分の愛する息子を遣わしました。見通しのきく主人であれば、最初のしもべが「袋叩きにされ、手ぶらで帰ってきた」ときから、すでにもう先を見越したに違いないところです。ところが、二度目のしもべは「頭をなぐられ、はずかしめ」られます。三度目のしもべは「袋叩きにされ、しかも殺され」ます。にもかかわらず、なおも最後の切札として、「自分の子なら敬ってくれるだろう」と思い、自分のいのちそのものである自分のひとり子を遣わします。すると、その農夫たちはこう話し合った。『あれは跡取りだ。さあ、あれを殺して、あれの相続財産を手に入れよう。』と。そして、彼をつかまえて殺してしまい、ぶどう園の外に投げ捨てたのです。

●考えてみれば全くおかしい話です。まさに愚かで異常なぶどう園の主人の行動です。しかしその愚かしさの中に、異常さの中に、神の愛があるのです。神の愛は私たちの理解をはるかに超えているのです。このたとえ話は当時の指導者たちに対して特に語られたものです。

【新改訳 2017】ルカの福音書 13 章 33～34 節

- 33 しかし、わたしは今日も明日も、その次の日も進んで行かなければならない。預言者がエルサレム以外のところで死ぬことはあり得ないのだ。』

初代教会の信仰告白

34 エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。

●しかし先のたとえ話は、最後の息子が殺されて、ぶどう園の外に投げ捨てられたことで終わっていません。続きがあります。

42 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、聖書に次のようにあるのを読んだことがないですか。

『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。』

43 ですから、わたしは言うておきます。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ民に与えられます。

44 また、この石の上に落ちる人は粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。」

45 祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスのこれらのたとえを聞いたとき、自分たちについて話しておられることに気づいた。

46 それでイエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者と認めていたからである。

●『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。』というのは、詩篇 118 篇に引用されていることばです。このことばを読んだことがないのかとイエシュアは指導者たちに言っています。彼らが捨てた石、その石を神は家を建てるうえでなくてはならない最も大切な石、永遠に価値のある要の石としたという意味です。「石」(「エヴェン」)とはイエシュアのことで、「捨てた石」を「要の石」としたとは、復活を預言したことばだったのです。にもかかわらず、ユダヤの指導者たちは、神を恐れることなく、自分たちの立場を守るために、神から遣わされた最後の切札である御子イエシュアを拒絶し、葬ったのです。

●しかしこの話は、異邦人である私たち一人一人に対しても語られていると思います。主人が遣わしたしもべに対する拒絶は、結局のところ、人間は自分を神とし、自分勝手に生きたいと願っているところからきています。どこまでも自分中心であろうとする人間の罪深さが、最後の切札である神の息子を拒絶して、キリストの十字架の敵として歩んでいます。ここに私たち人間の奥深い罪があると言えます。

●神はこのイエシュアを死からよみがえらせました。ですから、**私たちは神の最後の切札として遣わされたイエシュアのことばに耳を傾けなければなりません。**このイエシュアの語られたことばは神のことばです。御父のことばそのものなのです。そしてそれは私たち一人ひとりに対する愛の呼びかけでもあります。私たちが神に造られた者として、その栄光に満ちた姿へと造り変えようとする神のラブ・コールです。ですから、私たちが、当時の人々と同じく、このイエシュアを拒絶することがありませんように。イエシュアの語ることばによくよく耳を傾け、その真意を悟ることができなければなりません。そして、イエシュアの友となって神の秘密を知る者とならなければならないのです。

II. イエシュアは大祭司です

ベレーシート

(1) 祭司とはなにか

●今回は「イエシュアはキリストです」という説教シリーズの第二回目で、「イエシュアは永遠の大祭司」であるということ学びます。その前に、「祭司」(ヘブル語の「コーヘン」**קֹהֵן**、ギリシア語の「ヒエリユース」**ἱερεύς**)とはどのような人で、どんな務めが与えられているかについてふれてみたいと思います。「祭司」とは「神に仕える人」です。「仕える」といっても神のためになにかをすることではありません。神に仕える祭司とは、神とともに歩み、神と一つとなるためにいつでも神の御前にいる人のことです。多くの時間を神とともに過ごすことで、神によって満たされる人のことです。そのことによって、主を知り、主と一つとなり、主がその人を通して現わされるようになる、これが祭司の務めです。

●以下の人々、特に①～⑦までは「祭司」と呼ばれていませんが、彼らは事実上の祭司です。

- ①**アダム**・・・墮落する前は絶えず神の臨在の中にいましたが、墮落後、彼は神の御顔を避ける者となりました。
- ②**エノク**・・・神とともに歩みました(自発的)・・・「歩む」に「ハーラフ」のヒットパエル態が使われています。
- ③**ノア**・・・神とともに歩みました(自発的)・・・同上。
- ④**アブラハム**・・・主から「あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ」と言われ、「歩む」(ハーラフ)の頭文字の「ヘー」(**ה**)が名前の中に組み入れられて、「アブラム」から「アブラハム」へと改名されました。つまり、アブラハムは神の御前に完全な信頼をもって生きるようにと召されたのです。
- ⑤**イサク**・・・父アブラハムといつもいっしょであることで、神の御前に生きていました。
- ⑥**ヤコブ**・・・人を押しつける性質をもった彼が、神の主権的な恵みによってイスラエルと改名され、神の臨在の中で過ごすようになりました。
- ⑦**モーセ**・・・神に召された後には、常に主の前にいる者となりました。シナイ山では40日間、山に留まり、神から律法を授けられました。長く神と話したため彼の顔は神の栄光の輝きを放っていました。
- ⑧イスラエルの全員(祭司の国) ⇒特に**レビ族**は、イスラエルの中で特別に祭司職を与えられました。
- ⑨詩篇の作者たち・・・**ダビデ**も含めて(ダビデは王でありながら、同時に祭司でした)。

●そもそも「祭司」(「コーヘン」**קֹהֵן**)は、「主の前に立って(アーマド**עָמַד**)、仕える(シャーラト**שָׂרַף**)」(申命記 10:8)者つまり、神と人との間に立つ仲介者を意味します。モーセの律法賦与以前では、父親が一家の祭司となっていました。しかし律法の賦与以後は、レビ族、すなわちアロンとその子どもたちが専門的な祭司職を担うようになって行きました。

(2) 預言者、大祭司、王のかかわり

●油を注がれて、神の働きを分与された三つの主要な務めは預言者、大祭司、そして王でした。これらの

初代教会の信仰告白

務めの中で祭司の務めが第一であり、預言者と王の務めを導きます。つまり、神の代理者として神の民を導き支配する王の務めも、また、神のみことばとそのみこころを正確に民に告げる預言者の務めも、第一の祭司の務めにすべてはかかっています。それゆえ、祭司的な務めをする者はきわめて重要なのです。祭司の中でも「大祭司」は、祭司職においては最高峰にいる存在でした。

1. 大祭司に対する厳しい規定

(1) 神が求められるのは常に「完全さ」

●祭司職にある人々は、この世の事柄から離れて、神への礼拝に関する非常に厳しい規定を守らなければなりません(レビ 21:4~23)。祭司は特殊な装束を身に着け、祭司としてのしるしを身に帯びます。祭司が自らを聖としなければならないのは、彼らがいけにえをささげる仕事にかかわっているからです。いけにえの血を神にささげるのは祭司特有の仕事でした。「律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、・・また血を注ぎ出すことがなければ罪の赦しはなかった」からです(ヘブル 9:22)。そのため、祭司の任職の儀式では聖別のために血が祭壇から取られて、祭司の右の耳たぶ、右手の親指、右足の親指につけられます。さらに、祭司の装束には血が降りかけられます(レビ 29:1~21)。したがって、聖別の儀式やささげ物の儀式では、すべてが血まみれという状態になります。

●祭司の装束に関して、特に、大祭司の装束は(右図)手の込んだものでした。興味深いことに、衣裳を「着る」にあたるヘブル語の元々の意味は、「被う」「隠す」です。罪を犯して恥を受けているアダムとエバを被うために、神は動物の皮衣を作って「着せ」ました(創世記 3:21)が、そこで使われているヘブル動詞は「ラーヴァシュ」(לָוַשׁ)です。ヒフィル(使役)態で「着せる、まとわせる、覆い隠す」の意味です。いけにえをささげる祭司のだれもが身に着ける最も基本的な装束は白い布ですが、それは神のきよさを表わしています。それはあたかも、祭司が神ご自身のご性質に被われているかのようです。もし、この被いなしに神に近づくならば、恐ろしいさばきを招くことになります。



●裸はイスラエルにおいては許されません。ましてや神殿に近づくときには決して裸であってはならないことなのです。この理由から、幕屋には階段というものはありませんでした。階段があると、祭司が装束を身に着けてかんだときに肌の一部が露出する危険があるからです(出エジプト 20:26)。後の時代に階段が必要となるほどの神殿が建てられると、祭司は装束の下に麻布で作ったズボンをはくようになります(同、28:42)。

●しかし唯一の例外があります。聖書の中で、祭司(しかも大祭司)が裸でいけにえをささげ、神に受け入れられている箇所が一つだけあります。それはカルバリの丘です。イエシュアが十字架で磔にされたとき、イエシュアはすべて脱がされました(ヨハネ 19:23)。しかし、この方こそ、人類史上はじめて神の前にた

初代教会の信仰告白

だご自身の義によってのみ立つことのできた方です。この方に祭司の装束は不要でした。なぜなら、イエシュアは全き神の御子として、「悪も汚れもなく、罪人から離され、また天よりも高く上げられた大祭司」(ヘブル 7:26)として、とこしえの祭司として(同、7:17)、ご自身の血をささげられたからです。このキリストのいけにえが被いとなって、私たちは今、神の御前になんらはばかりなく立つことができるのです。私たちの衣はキリストの血潮によって白く洗われたのです(黙示 1:5/7:14)。ここに大祭司イエシュアの「さらにすぐれた」務めがあります。

●イスラエルの民がエジプトを出てシナイ山で神と契約を結びました。そのとき神に近づくための礼拝規定が定められました。それによれば、神へのいけにえ、神へのささげものには、傷のないもの、完全なものが必要でした。なぜなら、神が求められるのは常に「完全さ」(「ターミーム」**תְּמִימִים**)だからです。この「完全さ」は神と人との仲立ちをする祭司たちにも求められました。しかしこの祭司職制度(世襲制)ははじめからさまざまな欠陥をもっていただけでなく、イエシュアが来られた時代には祭司制度による腐敗がはびこってしまっていたのです。イエシュアの宮きよめ事件はそのことをあかししています。

(2) 新たな系譜による祭司職

●そのために、長い間にわたって連綿と続けられてきた祭司制度は完全に廃止され、全く新しいことが神によって立ち上げられたのです。それまでの流れを根底からひっくり返すような新しい祭司が起こされたのです。神はこれまでの世襲制による祭司職制度に代わる、**全く異なる系譜による祭司職**を打ち建てられました。全く別のサイトというの、レビ部族からではない大祭司。つまり、王の職務を司っていたユダ部族からでした。その系譜のルーツに「メルキゼデク」という人物がいます。「メルキゼデク」とは、サレム(エルサレムのこと)の王であり、アブラハムを祝福した祭司です。年代としてはイエシュアが登場する2千年前です。



●ダビデはユダ部族の王でしたが、彼は礼拝を改革するという祭司としての務めもしていたのです。その祭司としての務めは、本来の祭司たちのように動物をほふったりすることではなく、音楽による賛美のささげものをした祭司でした。祭司が着る「亜麻布のエポデ」を着ていたことが聖書に示されています。ダビデは神の箱をシオンの丘に運び入れる時には、そのエポデを脱ぎ捨てて踊っています。このダビデ王がしたことは、やがて遣わされる救い主の預言的啓示と言えます。

●王であることと同時に、祭司であることは、本来、律法ではゆるされていません。サウル王がサムエルの到着を待たずに祭司の務めをしてしまったことで、彼は神から王位を剥奪されています。王でありながら、祭司としての務めをなすその予型がメルキゼデクであり、それがダビデに受け継がれ、さらにイエシュアへと流れて行きます。祭司制度とは異なるこの系譜によって、完成されたのです。

2. さらにすぐれた務めをしておられる大祭司イエシュア

●新約のヘブル人への手紙には、その手紙を特色づけているキーワードがあります。それは「さらにすぐれた」(あるいは、「よりまさった」という訳もあります)という言葉です。ヘブル書の中には「さらにすぐれた」という表現が10回ありますが、そのうち、大祭司であるイエシュアについて言われているのは7回もあるのです。どの点が「さらにすぐれた」面なのでしょう。

- (1) 完全な、罪も汚れもない大祭司。自分のために、また人々のために毎日いけにえを捧げる必要のない方。
つまり一回的な完全な贖いがなされた。しかも、永遠に有効。
- (2) キリストご自身が私たちのための罪のいけにえとなられた。それゆえキリストを持つことにより、いつでも、大胆に、神に近づくことができる。
- (3) キリストはいつも生きていて、神に近づく者のためにとりなしの務めをしておられる。
- (4) 神の律法を私たちの思いの中に入れ、私たちの心に書きつけて、「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」という約束を実現する。

●上記の点こそ、大祭司イエシュアの「さらにすぐれた務め」の内容であり、古い祭司制度がなしえなかったことなのです。

3. あわれみ深い大祭司イエシュア

●ヘブル書の特徴づける重要なことばがあります。ヘブル書は全13章ありますが、1章と11章を除くすべての章に登場する名詞があります。それは「大祭司」(「コーヘン・ハツガードール」 כֹּהֵן הַטָּהוֹר)という言葉です。すでに、この手紙のキーワードは、「イエシュアを仰ぎ見る」こと、「イエシュアから目を離さないでいなさい」というものですが、換言するなら、「大祭司であるイエシュアから目を離さない」ということがヘブル人への手紙の主要なメッセージなのです。

(1) あらゆる点で、私たちと同じになることの必要性

【新改訳2017】ヘブル人への手紙2章17節

したがって、神に関わる事柄について、あわれみ深い、忠実な大祭司となるために、イエスはすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それで民の罪の宥めがなされたのです。

●「したがって」(新改訳改定第三版までは「こういうわけで」と訳されていました)と訳されたギリシア語の「ホセン」(ὅθεν)は、前の節を受けて「それゆえに」、「だからこそ」とも訳せる接続詞です。そして原文には「イエシュアはあらゆる点で私たちと同じようになることがどうしても必要であった」という文章が続いているのです。原文では最初にくることばが強調されます。そのことばとは「オフエイロー」(ὀφείλω)で、「～する義務がある、～せねばならない」という意味の動詞です。つまりイエシュアは、あらゆる点で、兄弟である私たちと同じになることがどうしても必要だったのです。それは特に私たちの罪の宥めのため

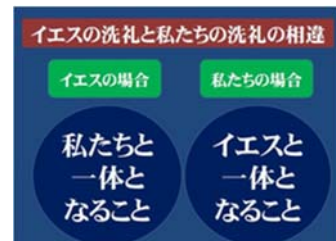
初代教会の信仰告白

にどうしても必要だったのです。それはすなわち「からだ」を持つことです。なぜなら、血を流すことがなければ、罪の赦しはないからです。

●しかし、「私たちと同じになる」という意味は、単に私たちと同じ人間としてのからだ(肉体)を持って罪を赦すということだけではありません。そこにはもっと深い意味が隠されているように思います。受洗するということは、イエシュアの場合は「私たちと一体(ひとつ)となること」の本格的なスタートを意味しますが、私たちの場合は「イエシュアと一体(ひとつ)となること」の本格的なスタートを意味する一回的な出来事を意味します。イエシュアが私たちと一体となることについて、もう少し詳しく取り上げてみたいと思います。

(2) あわれみによる連帯の力

●「あわれみ」、英語ではコンパッション(Compassion)。このことばが意味することは、「ともに苦しむこと、ともに耐えること」です。あわれみは、傷ついているところへ赴かせ、痛みを負っている人々のところに赴かせ、失意や恐れ、混乱や苦しみを分かち合うようにさせます。また、悲惨の中にある人とともに叫びをあげ、孤独な人とともに悲しみ、涙にくれる



人とともに泣くように私たちを促します。それはまた、弱い人とともに弱くなり、傷ついた人とともに傷つき、無力な人とともに無力になることを要求するのです。そのように、あわれみは、人間の状態のなかにどっぷりと浸(ひた)ることを意味します。—これが、「主は**すべての点**で兄弟たちと同じようにならなければなりませんでした。」**「あらゆる点**で、兄弟である私たちと同じになることが、どうしても必要だったのです。」ということばの意味するところでは。

●「あわれみ」をこのように理解すると、それは単なる「親切」とか、「優しさ」だけでは説明しきれないものがあることがはっきりとします。あわれみは私たちの自然な心の反応として生まれるものとは言えません。むしろ、逆に避けたいものではないかと思えます。なぜなら、私たちは本能的に苦痛を回避する(嫌って避けること)ものだからです。ましてや、他人のために、他人とともに苦しむことなど望まないからです。

●イエシュアは「あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたもあわれみ深い者となりなさい。」(ルカ 6:36)と言われましたが、それは、人間の状態のなかにどっぷりと浸って、ともに苦しむこと、ともに耐えることへの呼びかけなのです。ですから、このイエシュアの呼びかけは、実は、私たち人間の生まれつきの性質に逆らうような呼びかけと言えます。

●神は全能の神なのですから、その力で私たちの問題を簡単に解決することができたはずで、なにも私たちと同じようになって、共に苦しむ必要はなかったはずで、今日の「オタク族」のように、天にいながらにしてなんでもできたはずで、ところが聖書は「主は**すべての点**で兄弟たちと同じようにならなければなりませんでした。」とあります。「**あらゆる点**で、兄弟である私たちと同じになることがどうしても必要だったのです。」と言います。なぜでしょう!! その理由は、神のあわれみの神秘(奥義)が示されるためです。神が私たちとともにおられるということの真意を経験させるためです。

初代教会の信仰告白

●神はあわれみ深い神であるというとき、その意味するところは、なによりも「神がわたしたちと一体になることを選ばれた」ということを意味します。主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥とはされません。このことはヘブル2章11節でこう記されています。「聖とする方も、聖とされる者たちも、みな一人の方から出ています。それゆえ、イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥とせずに、こう言われます。」と。ここで重要なことは、「聖とする方」(イエシュア)が、「聖とされる者たち」(第一義的にはアブラハムの子孫である人々)を「兄弟と呼ぶことを恥としない」ということです。

●私たちの肉親でも、自分の兄とか、姉とか、あるいは弟とか、妹とかを一家の恥と決めつけてしまうことがあります。家族でありながらそうなのです。あいつはこの家の恥だというわけです。あいつさえいなければ、と苦々しく思っている兄弟姉妹がいるのではないのでしょうか。あの兄、弟がいるばかりに、良い縁を結べない、良い会社に就職できない、そう思っている家族が多いのではないのでしょうか。自分の子どもを、甲斐性なしと言い、口くでもない子どもを授かったもんだと嘆く親、反対に、どうしようもない親から生まれたもんだと嘆く子ども。それぞれを家の恥としている家族は多いのではないのでしょうか。しかし、イエシュアを長兄とする神の家族にあっては、この長兄は、たとえどんな兄弟姉妹であったとしても、決して恥とはしないというのです。この長兄の心は父の心です。むしろこの兄であるイエシュアは自分の兄弟姉妹に対して、共に苦しみ、共に辱めを受けること、共に耐えることを自ら進んで受け入れるすばらしい兄なのです。これが「あわれみ」です。

●イエシュアは「あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたもあわれみ深い者となりなさい。」(ルカ 6:36)と言われましたが、イエシュアご自身のすべての行動の背後には、このあわれみの心があったことを知ることが重要です。福音書の中には実に多くの奇蹟の出来事が記されています。もし、病氣や痛みを苦しんでいる人々が、その痛みから突然に解放されたという事実だけに私たちが関心を持っているとすれば、私たちは福音書の中の多くの奇蹟の出来事を誤解することになります。ここで大切なことは、病氣をいやされたことではなく、このいやしへとイエシュアを動かしたものがなんであったかということです。イエシュアのすべての「いやし」のわざは、イエシュアの「連帯しようとする深いあわれみ」によるものなのです。

4. 思いやる大祭司イエシュア

【新改訳 2017】

ヘブル書 4章 15節「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。」(同情できる方)

ヘブル書 5章 2節「大祭司は自分自身も弱さを身にまわっているのです、無知で迷っている人々に優しく接することができるのです。」(思いやることのできる方)

(1) 「優しく接する」(思いやる)という務め

●「優しく接する」(「思いやる」)と訳されたギリシア語は「メトリオパセオー」(μετριολπαθεω)と言

初代教会の信仰告白

って、この箇所には使われていない言葉です(ヘブル語は「ハーマル」**לרמה**)。新約聖書でここ1回しか使われていないことばです。だからと言って重要ではないということでは決してありません。このヘブル書全体のキーワードは「イエシュアを仰ぎ見る」ということばですが、この「仰ぎ見る」という「アフオラオー」(**ἀφοράω**)ということばも、ヘブル書では1回しか出てきませんが、ヘブル書においては最も重要なことばなのです。

●「思いやる」ということについて、ヘブル語の「ハーマル」(**לרמה**)を調べてみると、その初出箇所は出エジプト記2章6節です。

【新改訳2017】

それを開けて、見ると、子どもがいた。なんと、それは男の子で、泣いていた。彼女はその子を**かわいそうに思い**、言った。「これはヘブル人の子どもです。」

●ナイル川の茂みの中にあつた籠の中にいた男の子を「かわいそうに思った」のはエジプトの王女です。単にそう思っただけでなく、王女はこの男の子を「モーセ」と名付け、息子として育てるのです。「思いやる」ことについてのヘブル語の類義語は「ラーナム」(**לרנמ**)で、これをギリシア語にすると、「スプランクニゾマイ」(**σπλαγχνίζομαι**)となります。神のあわれみを表わす語彙で、この言葉があるところには、単なる同情だけでなく、必ずあわれみの行為が伴っています。特にイエシュアの「スプランクニゾマイ」(**σπλαγχνίζομαι**)を一つ一つ調べるならば、「思いやる」ことがどういうことかを知ることができます。

Ⅲ. イエシュアは王です

ベレーシート

- 「イエシュアはキリストである」という初代教会の信仰告白の第三は、イエシュアが王であるということです。

1. 「ダビデの子」という称号をもった王なるメシア

●イエシュアを「ダビデの子」と呼んだ者たちが福音書の中に登場しています。「ダビデの子」という称号は「王なるメシア(キリスト)」の称号です。共観福音書の中では、マタイの福音書がマルコとルカにあるすべてを包含していますので、マタイの箇所で見えます。ちなみに、イエシュアはこの称号をご自身で用いることはありませんでした。イエシュアはご自分のことを「人の子」と呼んでいます。実は、これもメシア的称号ですが、それについては今回ふれないことにします。

マタイ福音書	「ダビデの子」と呼んだ者	内 容
9:27	二人の盲人	「ダビデの子よ」と叫びながらイエスについて来た。
12:23	群衆	イエスが悪霊につかれた人、盲人、口もきけない人をいやすのを見た群衆は、「この人はダビデの子なのだろうか」と言った。
15:22	カナンの女	自分の娘のためにイエスのもとに来て、「主よ。ダビデの子よ」と言って、いやしを願った。
20:30	二人の盲人	「主よ。私たちをあわれんでください。ダビデの子よ。」と叫んだ。
21:9	群衆	ろばの子に乗ってエルサレムに入場されるイエスに対して、「ダビデの子にホサナ。」と叫んだ。
21:15	子どもたち	宮の中で子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と言って叫んだ。
22:42	パリサイ人	「キリストはだれの子か」というイエスの質問に対して、パリサイ人たちは「ダビデの子です」と答えた。

- 「ダビデの子」－ヘブル語では「ベン・ダーヴィッド」(בֶּן־דָּוִד)です。上記のチャートを見ると分かるように、イエシュアを預言されたメシア(キリスト)として信じて呼んだ人々は、当時のエルサレムの指導者たちではなく、盲人、カナン人、そして群衆、子どもたちでした。このことは重要な点です。「ダビデの子」という称号がメシアを指すようになったのは、神がダビデに、「あなたの子孫が永遠の王国を確立する」と約束したことにあります。これは「ダビデ契約」と言われるものです。以下がその契約です。

【新改訳 2017】Ⅱサムエル記 7章 11～16 節

- 11 それは、わたしが、わが民イスラエルの上にさばきつかさを任命して以来のことである。こうして、わたしはあなたにすべての敵からの安息を与えたのである。【主】はあなたに告げる。【主】があなたのために一つの家を造る、と。

初代教会の信仰告白

- 12 あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。
- 13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。
- 14 わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。彼が不義を行ったときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。
- 15 しかしわたしの恵みは、わたしが、あなたの前から取り除いたサウルからそれを取り去ったように、彼から取り去られることはない。
- 16 あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。』

●11節の『【主】があなたのために一つの家を造る』の「家」(「バイト」בַּיִת、単数)とは、ここではダビデの住む家のことではなく、ダビデの子孫、ダビデの王族としての家系を意味します。また「造る」と訳された原語は「アーサー」(בָּנָה)で、新共同訳は「(家を)興す」と訳しています。実際的には、ダビデから生まれる世継ぎとしての子孫(単数)、すなわちソロモンが主のための家を立てること、そして主はソロモンの王国の王座をゆるぎないものとして、永遠に堅く建てる(据える)という約束ですが、そのソロモンの王座は、ソロモンよりもはるかに勝る王であるイエシュアがその視野に入っているのです。これが「ダビデ契約」と言われるものです。

●ダビデの王国(別名、ユダ王国)はやがて神への背きの罪のゆえに国を失い、バビロンの捕囚の民となりますが、それは神がご自身の民を新しくリセットするための厳しい計らいであり、決してダビデの家を見捨てられたわけではありませんでした。「ダビデに対して語られた約束」のゆえに、再び、バビロンからの帰還を経験します。それは主の民に対する「ヘセド」(恵み、いつくしみ、愛)のゆえであり、契約に対する神の側の責任を行使されたからです。

●神がダビデと結ばれた契約は、「王国」(ヘブル語「マルフト」(מְלֻכּוּת)、ギリシア語「バシレイア」(βασιλεία)、英語「キングダム」(kingdom))に関する約束です。しかもそれは、ダビデとその子孫に永久に与えられたものです。この王国が完全な形で地上に実現するのは、キリストの再臨後の千年王国時代においてですが、その「王国」の訪れがイエシュアの初臨と共に始まっているのです。このことがイエシュアの公生涯の第一声である「天の御国が近づいた」という意味です(「天」とは「神」の別称)。つまり、「神の国、神の統治、神の王国」がイエシュアの到来とともにすでに始まったことを意味しているのです。しかしその完成は再臨後の千年王国においてです。主の祈りの中にある「御国が来ますように」との祈りは、まさに神がダビデに約束された地上における神の王国の完全な到来を意味する祈りなのです。

2. 鉄の杖を与えられた王なるメシア

●イエシュアがベツレヘムでお生まれになったとき、当時のユダヤの王はヘロデでした。そのヘロデのもとに東方の博士たちが訪ねてきます。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」と。それを聞いたヘロデはどう

初代教会の信仰告白

いう態度を取ったでしょう。聖書には「恐れ感った」とあります。新共同訳では「不安を抱いた」、塚本訳では「うろたえた」と訳しています。使われているギリシア語は「タラツソウ」(ταράσσω)で、「恐れて、ひどく動揺する、恐怖が襲う」ことを表わす動詞です。昔、ユダの王アハズの時代に北からエフライムとアラムの同盟軍が攻めてくるという知らせを聞いたときに、王の心も民の心も、「林の木々が風で揺らぐように動揺した」(イザヤ 7:2)とありますが、それと似ています。ヘロデ王だけではありません。エルサレム中の人も王と同様でした。この世界に二つの太陽は必要としないように、一つの国に二人の王が存在するという事はあり得ないからです。そこで、ヘロデは民の祭司长、学者たちをみな集めて、キリストはどこで生まれるのか調べよと問いただします。すると彼らは「ユダヤのベツレヘムで生まれると預言されています。」そこで、ヘロデは訪ねてきた博士たちをベツレヘムに送ります。そしてこう言います。「行って幼子のことを詳しく調べ、わかったら知らせてもらいたい。私も行って拝むから・・・」。しかしこれは真っ赤なうそで、真意は悪意を企んでいました。

●東方の博士たちは星を頼りにベツレヘムの方へ行き、幼子のところに導かれて、その幼子を見、そして拝みました。そして宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげました。その後、ヘロデに幼子の居所を教えることなく、自分の国に帰って行きました。だまされたと分かったヘロデは、非常に怒って、ベツレヘムとその近辺の2歳以下の男の子を一人残らず殺させました。なぜこんなことをしたのでしょうか。それはその幼子が自分の地位や立場を脅かす存在となることを悟ったからです。結局のところ、自分の上に立つ、自分を支配する王の存在を認めたくなかったからです。そのために多くの子供が犠牲になりました。これがヘロデ王のしたことです。ヘロデのみならず、当時の宗教指導者たちも全く同じでした。

●詩篇 2 篇には、神の統治(支配)に逆らうこの世の権力者たちの運命が預言されています。その詩篇を見てください。

【新改訳 2017】詩篇 2 篇

- 1 なぜ国々は騒ぎ立ち もろもろの国民は空しいことを企むのか。
- 2 なぜ地の王たちは立ち構え 君主たちは相ともに集まるのか。【主】と主に油注がれた者に対して。
- 3 「さあ彼らのかせを打ち砕き 彼らの綱を解き捨てよう。」
- 4 天の御座に着いておられる方は笑い 主はその者どもを嘲られる。
- 5 そのとき主は怒りをもって彼らに告げ 激しく怒って彼らを恐れおののかせる。
- 6 「わたしがわたしの王を立てたのだ。わたしの聖なる山シオンに。」
- 7 「私は【主】の定めについて語ろう。主は私に言われた。『あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。』
- 8 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。地の果ての果てまであなたの所有として。
- 9 あなたは鉄の杖で彼らを牧し 陶器師が器を砕くように粉々にする。』
- 10 それゆえ今王たちよ 悟れ。地をさばく者たちよ 慎め。
- 11 恐れつつ【主】に仕えよ。おののきつつ震え 子に口づけせよ。
- 12 主が怒りおまえたが道で滅びないために。御怒りがすぐにも燃えようとしているからだ。
幸いなことよ すべて主に身を避ける人は。

初代教会の信仰告白

●人間がどんなに神に逆らおうとも、あるいは神に油注がれた者を拒絶し、逆らい、殺そうとも、神は天においてその仕事を笑っておられる風景が見えます。神に逆らう者たちの企みは、神によって必ず挫折させられます。神に逆らう者たちの企みは、神の統治において何らダメージにはならず、むしろ神はそれをも利用してご自身の支配を打ち建てられます。

●また6節によれば、神がご自身の統治を遂行する王を、神自ら油を注いで立てられると預言されています。この預言は御子イエシュアにおいて実現します。御子は御父から「鉄の杖」を与えられて、敵を粉碎する権威と力を与えられます。それゆえ、人稱なき存在(聖霊)は10節以降でこう言われます。

10 それゆえ今王たちよ 悟れ。地をさばく者たちよ 慎め。

11 恐れつつ【主】に仕えよ。おののきつつ震え 子に口づけせよ。

12 主が怒りおまえたちが道で滅びないために。御怒りがすぐにも燃えようとしているからだ。

●「御子に口づけせよ」とは、「御子の前に降伏せよ」という意味です。古代においては、戦争で敗れた国の王が、勝った国の王の前にひれ伏してその王の足に口づけすることが求められました。この口づけは「忠誠の誓い」を表わすものでしたが、それは同時に、礼拝の行為を表わす表現でもあったのです。しかしこの詩篇2篇の構図が地上において現実になるのは、実は、千年王国の到来の時です。まだ先のことですが、確かな希望です。神は約束されたことを必ず実現される方だからです。信仰とはまだ目に見えないことを確信することです。この信仰を神はとて喜ばれることを心に刻みたいと思います。神が約束されたこと、たとえそれがとて信じがたいことであったとしても、どのようにしてそれが実現されるのかを思うだけで、私たちの心は踊るのです。

3. 良い羊飼いにたとえられる王なるメシア

(1) 人々が期待した王なるメシア

●イエシュアが来られた当時のユダヤは、大祭司を頂点とする宗教制度のシステムと同時に、異邦人の支配、つまり強大なローマ帝国の支配の下で人々が苦しんでいました。そうした時代の背景の中で、イエシュアという方はまさに神によって油注がれた王として、「鉄の杖」をもってこの地上に神の王国を打ち建てるために来られた方であると、群衆も弟子たちも次第に信じるようになりました。なぜなら、彼らはメシアにしかできない奇蹟の数々をイエシュアの中に見たからです。ですから、たとえユダヤ人の古い宗教的支配体制がどれほど強固であったとしても、またローマ帝国の支配体制がどれほど強大であったとしても、主イエシュアにおいて現される神の力によって、それらは必ず覆されると信じるようになっていたのです。

●しかし、彼らはメシアがそうした栄光をお受けになる前に、必ず、苦しみを受けるということを理解できませんでした。イエシュアは繰り返し、繰り返し、ご自分がエルサレムにおいて、指導者たちから「多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえる」と語っていましたが、そのことを弟子たちはだれ

初代教会の信仰告白

ひとりとして理解することができませんでした。メシアの栄光だけが期待されていたのです。

●人々はローマの支配体制が打ち倒されて、イスラエルが回復されることを望んでいました。そのことなくして神の国の到来はあり得ないと考えていました。ですから何よりもまず、ローマを打ち倒してくれる力ある王なるメシアを待ち望んでいたのです。そうした期待感から、弟子のヤコブとヨハネは前もってイエシュアに願いました。「あなたが栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください」と。ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めました。皆、考えることは同じでした。それほどまでに弟子たちは、イエシュアがメシアとしての王国を打ち建ててくださると確信していたのです。しかし当時のエルサレムにいた指導者たちがイエシュアをメシアであることを信ぜず、拒んだために神の国の実現は延期されてしまったのです。

●ユダヤの指導者たちがメシアとして遣わされたイエシュアを拒絶した罪によって、ユダヤ人は大きな苦しみを受ける結果となります。それは、ユダヤ人が国を失い、迫害を受け、全世界に離散していく悲慘な歴史をたどることになります。しかしやがて彼らが反キリストによる大患難を経験するとき、再び、「主の御名によって来られる方(メシアなるイエシュア)に祝福あれ」という悔い改めの祈りが起こります。そのとき、キリストは再臨され、神が約束したメシア王国がこの地上に到来するのです。

(2) 王なるメシアが治められる王国のイメージ

●聖書では、王なるメシアとその民との関係が、イスラエルの牧者と羊の関係にたとえられています。エゼキエル書 34 章にはそのうわしいかわりが示されています。本来、この 34 章は、イスラエルの民の上に立てられた指導者たちが牧者としての責任を果たさずに、自分たちの私腹を肥やしていたことが責められています。そこで神は自ら真のイスラエルの牧者となるという約束がなされているのです。

【新改訳 2017】エゼキエル 34 章 11～16 節

- 11 まことに、【神】である主はこう言われる。「見よ。**わたしは**自分でわたしの羊の群れを探し求め、これを探し出す。
- 12 牧者が、散らされた羊の群れのただ中にいるときに、その群れの羊を確かめるように、**わたしは**わたしの羊を確かめ、雲と暗黒の日に散らされたすべての場所から彼らを救い出す。
- 13 **わたしは**諸国の民の中から彼らを導き出し、国々から彼らを集め、彼らの地に連れて行き、イスラエルの山々や谷川のほたり、またその地のすべての居住地で彼らを養う。
- 14 **わたしは**良い牧草地で彼らを養い、イスラエルの高い山々が彼らの牧場となる。彼らはその良い牧場に伏し、イスラエルの山々の肥えた牧草地で養われる。
- 15 **わたしが**わたしの羊を飼い、**わたしが**彼らを憩わせる——【神】である主のことば——。
- 16 **わたしは**失われたものを探し、追いやられたものを連れ戻し、傷ついたものを介抱し、病気のを力づける。
肥えたものと強いものは根絶やしにする。**わたしは**正しいさばきをもって彼らを養う。

●神ご自身を意味する「わたし」(太字の部分)がとても強調されています。そして注目すべきは、下線の動詞です。11 節だけを注目すると、「見よ。わたしは自分でわたしの羊の群れを探し求め、これを探し出す。」

初代教会の信仰告白

とあります。この約束を実現するために、御父は御子イエシュアをこの地上に遣わされたのです。その預言が以下のみことばです。

【新改訳 2017】エゼキエル書 34 章 23～24 節

23 わたしは、彼らを牧する一人の牧者、わたしのしもべダビデを起こす。彼は彼らを養い、その牧者となる。

24 【主】であるわたしが彼らの神となり、わたしのしもべダビデが彼らのただ中で**君主**となる。わたしは【主】である。わたしが語る。

●「君主」と訳された「ナーシー」(נָשִׂי)は、上に立つ者、長、族長、君主を意味する語です。「わたしのしもべダビデ」とは、キリスト再臨前では「イエシュア」を、再臨後の「千年王国」では文字通りよみがえった「ダビデ」とも解釈できます。

●ここに見るイスラエルの牧者の羊に対するイメージは、まさに至れり尽くせりの「ねんごろな配慮」です。これが王なるメシア王国の統治のイメージです。この王なるメシアは昔も、そして今も「失われた(滅びた)羊を捜して」おられるのです。「羊」(ヘブル語「ツォーン」|נֶזֶם、英語「シープ」sheep)は単数・複数同形です。つまり、個人であっても、あるいはイスラエルの民のように民族的単位であっても、神にとってはその配慮は何ら変わりません。「人の子(イエシュア)は、失われた人を捜して、救うために来た。」(ルカ 19:10)のです。そして、エゼキエル書 34 章にイメージされている王国が建てられるのです。心躍る神のご計画です。現在、ユダヤ人たちはメシアを拒んだ罪により全世界に離散していますが、そうした民を神はすでにイスラエルに連れ戻し始めておられます。しかし、やがては全世界の四方からイスラエルの全家を集められるのです。これが王なるメシア(イスラエルの牧者)がなされることです。

●私たち異邦人は元木であるユダヤ人に接ぎ木された存在です。それゆえ、聖書で約束されたメシアの統治の祝福の中にすでに生かされています。しかし預言がこの地上に実現するときには、その統治は私たちの想像をはるかに越えたものとして訪れると考えられます。王なるメシアを信じる信仰を与えられていることを感謝しつつ、そのご支配の中に生きることを新たな思いで選び取りたいものです。